

長篇ミステリー

赤川次郎

眠れない町





TOKUMA NOVELS

赤川次郎

眠れない町

発行者 牧田謙吾

発行所 徳間書店

東京都港区東新橋一ノ二ノ一六 一〇五―八〇五五

電話〇三・三五七三・〇一一

振替〇〇一四〇〇―四四三九二

©Jirô Akagawa 2001 Printed in Japan

落丁・乱丁はおとりかえいたします

〈編集担当 松尾賢次〉

ISBN4-19-850516-0

長篇ミステリー

眠れない町

赤川次郎



間書店

TOKUMA NOVELS

眠れない町

本文插画・峰岸 達

111	104	93	83	72	63	53	45	34	23	13	9
不安の影	子役	親類	救いの女神	事故	突然の夜	休憩所	通夜の灯	間隙	遺体	階段	プロローグ
11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	

20	19	18	17	16	15	14	13	12
平和な眠り	克服	本日も異常なし	出迎え	深い眠り	断片	遺書	消えた時間	名演技
197	186	173	165	152	145	137	127	120

プロローグ

「仕事があるだけいいじゃないの」

それが妻の口ぐせだった。

確かに、当っていないわけではない。しかし、そう思ったところで、仕事の疲れが少しでも軽くなるわけでは、もちろんなかった。

カーテンに朝の明るさがぼんやりと浮かび上
って来ると、矢吹徹治はキーボードを叩く手を
休めて、椅子から立ち上った。

——また徹夜だ。

カーテンを開ける前に、大きな欠伸あくびをして、

肩をほぐそうと何度か上下させる。

「矢吹徹治じゃなくて、矢吹徹夜と改名するか」と、プロダクションの仲間と飲みながら冗談に言ったものだ。

面白くも何ともない。——本当になつてしまひそうだ。

カーテンを開けると、団地の棟々の合間に朝の太陽がわずかに顔を覗^{のぞ}かせていた。

これからは、日に日に、朝が遅くなる。

徹夜していても、いくらか気が楽だ。さて、寝ようというとき、抜けるような青空では、疲れも倍になつてしまう。

伸びをして、矢吹徹治はまた机の前に戻った。

「あなた」

「ワッ！」

と、矢吹は声を上げた。「びっくりさせるなよ」

「私しかいないでしょ、女は」

妻のそのみが、パジャマ姿で立っていた。

「愛だつて女だぞ」

「十歳は『子供』。『女』とは言わないわ」

と言つて、そのみも欠伸すると、「——いやだ、うつっちゃった」

「何だよ。ずいぶん早いじゃないか」

「目が覚めたのよ。言うの忘れてた。——運動会、出てね」

「運動会？　またそんなのがあるのか？」

と、矢吹はパソコンに向つて、「欠席ってわけにいかないのか？」

「何言つてんの。団地の運動会は欠席で出しと

いたわ。愛の学校だよ」

「それなら行くよ」

と、矢吹はキーボードを叩きながら、

「いつだい？」

「十月十日」

「分った」

「ちゃんと空^あけといてね。あーあ……」

そのみは欠伸して、「じゃ、おやすみ」

「ああ」

——矢吹はそのみがベッドへ戻って行くと、

深呼吸した。

あと一ページ。

頑張れ！——そう自分を励ましながら、矢

吹はいつしか居眠りしていた。

ふっと目を覚ますと、

「——やった！」

パソコンの液晶画面に、〈@〉だの〈*〉だのがズラズラと並んでいた。

居眠りしている間に、指がキーに触れていたのだ。

畜生！眠ってる間に勝手に打つといてくれるワープロなんてもんがありや、百万出しても買うのにな。

——矢吹徹治はフリーのライター、兼編集者である。

ライターとして、雑誌のコラムや記事を書きながら、編集プロダクションに所属して、雑誌や本の編集を請^うけ負っている。

不況の中、どっちか一方ではとても食べていけない。

かくて、こうして仕事しながら朝を迎えるのである。

「今日も昨日と同じ、か」

と、矢吹は呟いたが――。

それは正しくなかった。もちろん、矢吹は知る由もなかったのだが。

1 階 段

「寝ないの？」

と、コーヒーを注ぎながら、そのみが言った。

「寝たいさ、そりゃ。しかし、午前中に届けな
いと、レイアウト」

朝、すっかりもう明るい。

「愛、まだ寝てるのか」

「あと十五分したら起すわ」

と、そのみは時計を見て、「ゆうべは塾で遅
かったから、寝不足なのよ」

「十歳の子供が寝不足か」

と、ため息をつく。

「仕方ないでしょ、中学受験のため」

——この団地はかなりの広さと戸数があり、
小学校も中学校も、この中にある。

愛は今、ここの小学校の四年生だが、中学校
は大分「荒れている」という評判で、団地内
でも、子供を私立へ行かせようという家が少
ない。

愛は、この春から塾に通い始めたが、他の
たちは、二年生から通っている。そのみは
いさ

さか「焦^{あせ}って」いるのだった。

「一時間でも寝たら？ 出る前に起すわよ」

「いや、早く出て、社のパソコンを使いたい。

午後帰ったら寝るよ」

と、矢吹は言った。「お前、今日は？」

「六時まで。夕ご飯のおかずは何か買って帰る

わ」

そのみは近くのスーパーでパートの仕事をしている。塾の費用だけでなく、私立中学を受けるとなると、お金もかかる。

もし合格したら、もっと必要だ。

「そのときは父に頼むから」

と、そのみは言っているが。

コーヒーを飲んで、矢吹は立ち上った。

「出かけてくる」

「ひげ、剃^そってから行ってね」

「忘れてた！」

と、矢吹は顎^{あご}に手をやって言った。

「そのまま行ったら、ホームレスかと思われるわよ」

「全くだな」

愛が起きて来たら、洗面所を使われてしまう。

——矢吹はあわててひげを当りに行った……。

徹夜明け。

——編集の仕事をしていれば、朝の町を帰宅することなど珍しくない。

何人かで、夜通しの作業を終え、すっかり明るくなった町へ出るときなど、普段よりも目は冴えて、頭もいやにスッキリと快適で、

「仕事をした」

という充実感に足どりも軽くなる。

——若い内の話である。

矢吹も三十二、三までは、二日三日徹夜しても後に疲れが残らなかった。

ぐっすりと、八時間寝て起きれば、対談の仕事、取材、インタビュー、何でも手早くこなせたものだ。

しかし、今、三十八になつてみると……。

若い日々の無理が、一斉に「つけを払え」と押しかけて来ている具合なのである。

「——行ってくる」

と、〈605〉のわが家を出る。

エレベーターは、もう大分混み始めていた。

十一階建の棟に、エレベーター二基。朝の出

勤時は、苛々^{いらいら}と待つことになる。

各階で乗せて来るので、六階まで来ると一杯で乗れないことも珍しくない。

以前なら、エレベーターを待たずに階段を駆け下りたものだ。

エレベーターのすぐわきを階段が通つていて、今も、パタパタと足音たてて下りて来る人が少なくない。

エレベーターを待っていては遅刻するという「ぎりぎり組」と、苛々して待つくらいなら、歩いて下りようという「せっかち組」である。

その点、矢吹の場合は九時までに出勤しなくてはいけないわけではなく、気が楽だった。

「おい、まだか……」

と、ため息をついて、エレベーターを待つて